

梅原猛と仏教の思想

著者の菅原潤は、東北大学大学院文学研究科で博士号を修得した哲学者である。ドイツ哲学の素養を背景に、京都学派論を独自の立場から展開してきた。なかでも、『上山善平と新京都学派の哲学』（2019年）は、梅原と親交のあった、やはり京都大学哲学科出身の上山善平を論じた点で、姉妹編の関係にあるものとして注目される。

さて、本書は七つの章から構成される。「序章 仏教思想としての梅原猛を読む」で、梅原を仏教思想の観点から「哲学者」としてどのように評価するのが、本書の主眼であることが提示される。「第一章 闇から笑いへ——哲学修業時代」

第二章 仏教の思想——上山善平との共同研究」

研究活動であるがゆえに、一般読者における令名は高いにもかかわらず、アカデミズムでの評価が低い。より正確に言えば、その高下を問わず、本格的な評価の対象になりえなかった事態を招いてきた。

それゆえ、著者の問いは、果たして梅原の仏教研究は「哲学」足り得るものなのかということに帰結する。そして、その結論は、ギリシア哲学の田中美知太郎が評するところの「文芸作品」の域を出ないというものであった。良くも悪くもアカデミズムとしてのアマチュアリズムは、梅原が創設にかかわった日文研の学問傾向にも、総体としては今も当てはまるものだろう。

本書の「終章 顕密体制論と神仏融合——近年の研究との比較」もまた、法然をはじめとする鎌倉新仏教を思想的に重

視する梅原に対する、黒田俊雄の顕密体制論を通しての批判である。黒田の言うところは、中世の日本において鎌倉新仏教はあくまで異端的な存在にとどまり、天台宗や真言宗などの顕密仏教のほう

が社会の大勢を占めていた。空、および彼が彫った仏像であつた。いわゆる円空仏の微笑みが大衆の目

に、その悲しみを笑っている見解である。

性的観点から梅原のアマチュアリズムを論じるよりも、現在の彼の読者たちと同じように市井の衆への眼差しにこそ、梅原が大きく心をときめかせていた事実に着目すべきであつたと評者は考えている。

創設された時期のパブル経済期の雰囲気や反映した反マルクス主義としてのナショナリズムを掲げることができると。著者は梅原を「反ナショナリズム」の立場にたつとするが、「反国家主義」的なナショナリストと正しく

おいて自己を理解する立場であり、他者の視点のもとに自己を捉える視点が欠落している。残念ながら、本書の議論には、こうした地政学的な観点から日本文化論を捉える視点が抜け落ちているように思われる。

シヨナリズムは自意識に

の進化の目的とする価値観である。

他方、国民国家論とは、日本のナショナリズムの負的側面のように感じられる。とすれば、日文研の戦を契機とするアメリカによる植民地主義から出てきたものであることを明らかにした。酒井や西川にすれば、1961年のマルクス主義者と桑原の論文「梅原猛の見た夢——日本研究の国際化とは何か」を含む、日文研関係者による『梅原猛先生追悼集』（2020年）が分析対象に据えられなかったのは残念なことであつた。次回作に期待したい。（いそまへ・じゅんいち）国際日本文化研究センター教授・宗教学

以下、日文研に縁をはむものとして、あくまで私見ではあるが、梅原以降の日文研の抱える課題を示しておくたい。そこ

にみられる非アカデミズム的な姿勢は、学界内の矮小な問題設定を否定する点で有意義だが、自分の立脚点をひとつひとつ吟味する反省を欠落させる危険も伴う。さらに、

ムが生じてきたところでは、理解しやすいところである。その点において、ナ

シヨナリズムは自意識に

の進化の目的とする価値観である。

他方、国民国家論とは、日本のナショナリズムの負的側面のように感じられる。とすれば、日文研の戦を契機とするアメリカによる植民地主義から出てきたものであることを明らかにした。酒井や西川にすれば、1961年のマルクス主義者と桑原の論文「梅原猛の見た夢——日本研究の国際化とは何か」を含む、日文研関係者による『梅原猛先生追悼集』（2020年）が分析対象に据えられなかったのは残念なことであつた。次回作に期待したい。（いそまへ・じゅんいち）国際日本文化研究センター教授・宗教学

以下、日文研に縁をはむものとして、あくまで私見ではあるが、梅原以降の日文研の抱える課題を示しておくたい。そこ

にみられる非アカデミズム的な姿勢は、学界内の矮小な問題設定を否定する点で有意義だが、自分の立脚点をひとつひとつ吟味する反省を欠落させる危険も伴う。さらに、

ムが生じてきたところでは、理解しやすいところである。その点において、ナ

シヨナリズムは自意識に

の進化の目的とする価値観である。

他方、国民国家論とは、日本のナショナリズムの負的側面のように感じられる。とすれば、日文研の戦を契機とするアメリカによる植民地主義から出てきたものであることを明らかにした。酒井や西川にすれば、1961年のマルクス主義者と桑原の論文「梅原猛の見た夢——日本研究の国際化とは何か」を含む、日文研関係者による『梅原猛先生追悼集』（2020年）が分析対象に据えられなかったのは残念なことであつた。次回作に期待したい。（いそまへ・じゅんいち）国際日本文化研究センター教授・宗教学



四六判・250頁・1980円
法蔵館
978-4-8318-5570-1
TEL. 075-343-5656

梅原の仏教研究は「哲学」足り得たか

——追悼 梅原猛——

磯前 順一

以下、日文研に縁をはむものとして、あくまで私見ではあるが、梅原以降の日文研の抱える課題を示しておくたい。そこにみられる非アカデミズム的な姿勢は、学界内の矮小な問題設定を否定する点で有意義だが、自分の立脚点をひとつひとつ吟味する反省を欠落させる危険も伴う。さらに、ムが生じてきたところでは、理解しやすいところである。その点において、ナシヨナリズムは自意識にの進化の目的とする価値観である。他方、国民国家論とは、日本のナショナリズムの負的側面のように感じられる。とすれば、日文研の戦を契機とするアメリカによる植民地主義から出てきたものであることを明らかにした。酒井や西川にすれば、1961年のマルクス主義者と桑原の論文「梅原猛の見た夢——日本研究の国際化とは何か」を含む、日文研関係者による『梅原猛先生追悼集』（2020年）が分析対象に据えられなかったのは残念なことであつた。次回作に期待したい。（いそまへ・じゅんいち）国際日本文化研究センター教授・宗教学

★すがわら・じゅんいち
日本大学教授・哲学・倫理学。東北大学大学院博士課程単位取得退学。著書に『シェリング哲学の逆説』など。一九六三年